

第三講義 「学術情報リテラシー教育 —都留文科大学初年次教育の実践例—」

講師 日向良和氏

(都留文科大学情報センター講師)

0 はじめに

講演を始めるにあたっての枕として、ジャパネットたかたの高田明社長が日経のインタビューに対して答えた言葉を紹介する。高田社長は商品のセールスにあたり、性能をPRするやり方から、実際に使用する場面を具体的に提案する方法をとっている。例えばICレコーダでは録音時間や精度などを説明するよりも、共働きの家庭で家に帰ってきた子どもへの伝言といった新しい「使う場面」を具体的に提案することによって売り上げを伸ばした。このことは大学図書館の新入生に対するPRやガイダンスに示唆を与えていないか。このことが初年次教育を構築する際の共通するテーマとなった。

1 県内大学の新入生ガイダンス

古い調査となるが平成19年に山梨県内の大学・専門学校図書館18館を対象に、新入生ガイダンスについて質問紙調査をおこなった。新入生ガイダンスに注目したのは、ガイダンスの内容が、新入生向けならばまだ各大学の専門分野に入っておらず比較が可能であると思われたからである。

新入生ガイダンスにおいておこなわれている内容(7館以上回答)は、貸出返却法、資料探索(書架排列)、相互協力、図書館の場所、館内PC利用、図書館の意義・目的、館内機器等利用法、レファレンスといった内容であった。ここで、前述の図書館の使い方を新入生に提案しているかという視点で見ると、「図書館の意義・目的」のところで大学における図書館の位置づけなどが話されてはいるが、基本的には図書館の「機能」を説明するだけであり、図書館の使い方の域を出ていなかった。

県内大学の新入生ガイダンスの課題としては①必修の授業になかなか組み込めない、②職員のスキルアップ、③盛り込む内容と時間の兼ね合い、④任意参加者が少ない、⑤職員対応の限界、⑥学生の理解の限界、⑦施設の限界、⑧ガイダンス内容を忘れるといった8点ほどの課題が明らかになった。これらの課題は都留文科大学のガイダンスに対しても共通して見られる課題であった。課題の大多数は図書館のガイダンス内容・方法を改善することによって解決できることであった。

2 都留文科大学附属図書館の新入生ガイダンス体系

では現在都留文科大学でどのようなガイダンスがおこなわれているかを説明する。都留文科大学では新入生向けとして、①オリエンテーション(30分)、②ツアー(50分)、③基礎編(90分)の3つのガイダンスをおこなっている。各ガイダンスは入学直後のオリエンテーション期間から、7月の前期授業の終了までに集中しておこなわれる。学生が入学してすぐにレポートなどで調査をする必要があるため、できる限り入学直後におこなうようにしているが、ガイダンス担当者の負担は大きい。

①オリエンテーション：オリエンテーションは入学直後におこなわれる全学オリエンテーションの内、1日を使い5学科全ての学生に30分ずつ図書館の基本的な紹介をおこなう。内容は図書館の概要や目的、館内紹介、図書館の場所等で、図書館の利用案内をプロジェクタで投影しながらおこなわれる。ここで、後のツアーや基礎編といったガイダンスを受けるように新入生に動機付けをおこなっている。動機付けは大学と高校の授業の違いの説明や、大学のレポートの特徴と評価等を説明し、レポートの作成に図書館での調査が必須であること、調査結果の記述がレポート(単位)の評価につながることを説明して、新入

生に図書館利用の重要性を理解してもらっている。平成 22 年度はここでの PR が成功し、ツアー、基礎編のガイダンス参加者が大幅に増えている。

②ツアー：図書館ツアーはオリエンテーション直後の 4 月から 5 月にかけておこなわれた。新入生の講義スケジュールに合わせるため、月曜日から金曜日（一部土曜日）の 1 限から 5 限までで受け付けた。ツアーでは図書館利用案内とガイダンス資料（別添付録）を使いながら、本学所蔵資料の検索・入手を中心に、館内施設の配置や資料の排列などを、館内見学を交えて説明している。ここで大学にある資料を確実に入手できるように説明している。

③基礎編：基礎編は 90 分という長い時間を使って、レポート・論文作成のための網羅的な文献情報収集方法を説明する。まず 30 分程度のまとまった時間をかけて、なぜ大学生は情報を探さなければならないのか、参考文献や引用とは何か、信用できる情報とは何かといった情報リテラシーの基礎を、高等学校までの授業や試験と比較しながら細かく説明していく。この時、説明の根拠として平成 20 年 12 月に中央教育審議会のまとめた答申「学士課程教育の構築に向けて」の中の“各専攻分野を通じて培う学士力”の内容をガイダンステキストの中で示している。

次にガイダンステキストを使用しながら、大学生としてレポート・卒論を通じて各分野共通で利用できなくてはならない、図書の検索、雑誌の検索の流れを説明する。具体的には国立国会図書館の Web-OPAC、国立情報学研究所の Webcat Plus の検索法、国立情報学研究所の CiNii 検索法、電子ジャーナルの検索・利用法、他大学からの図書・文献の取り寄せ方を中心に説明していく。

基礎編を学ぶことによって大学生として卒業論文作成までの基本的な文献探索法を一部なりとも身につけることができる。

新入生向けガイダンス以外では、卒論むけの文献リスト作成を支援する研究編、教員から依頼されてそれぞれの講義・ゼミの内容や主題によっておこなわれるガイダンスがある。カリキュラムに組み込まれているガイダンスとしては、本学の社会学科 1 年生の必修授業である基礎演習の 2 時限（180 分）を使った学術情報リテラシーガイダンスがある。このガイダンスでは情報リテラシーに関する内容と検索実習を 180 分とツアー、基礎編よりも長い時間で詳しく説明していく。この授業では図書館 2F のパソコンコーナー 40 台を利用する。

現在のガイダンス担当者は主に 3 名（教員 1 名、職員 2 名）でおこなわれ、人数の多寡によりもう 2 名ほど加えておこなわれる。ガイダンス参加者数は、平成 22 年度ではのべ 971 名であり、内基礎編とツアーの参加者は前年度が 105 名だったところ、今年度は 386 名と 3 倍以上に増えている。これは前述のオリエンテーションでの PR が成功したためと考えられる。

ガイダンスの課題としては、2 年、3 年と学年が進んでいく間に内容を忘れてしまう学生がいるのではないかということと、まだ新入生全員が受けていないという状況である。ガイダンスの担当者が平成 22 年度は異動してしまったため、その引き継ぎに苦労している。これらに対しては、標準的なガイダンス内容の共有、ガイダンステキストの整備、複数担当者相互にガイダンスを経験するなどをおこなうことにより、担当者が変わったときの影響を最小限に抑えることができると考えられる。

3 情報リテラシーと利用者ガイダンス

情報リテラシーと利用者ガイダンスを考えるにあたって 2 つの文献を参考とした。一つ

は ACRL の「高等教育のための情報リテラシー能力基準」にある五つの能力基準と SIST-02 における参照文献の役割と要件である。

情報リテラシーはさまざまな場面で活用できると考えている。例えば小中学校等での調べ学習（本学は初等教育学科のある教員養成大学である）や、就職活動や、就職後の会社での情報収集・プレゼンテーション、暮らしにおいては病院や消費行動のための情報収集、さらに国政や地方自治を推進するための情報収集などの場面で情報リテラシーの活用が想定できる。情報リテラシーは現代社会において全ての人が持つべき能力であると考えられる。

4 新しい「利用者ガイダンス」

前述の通り情報リテラシーは現代社会において全ての人が持つべき能力であると考えているが、公共図書館や大学図書館でおこなわれてきたガイダンスは「情報リテラシー」を獲得するためのガイダンスとは必ずしもなっていなかった。これまでのガイダンスは図書館を利用する人が対象で、なぜ図書館を利用するかが抜けており、ガイダンスをおこなう司書の能力も低く、あくまでもその図書館を使うためだけのガイダンスであった。

今後の新しいガイダンスの形として、学生はもとより地域の市民に対して情報リテラシーを獲得するためのガイダンスを公立大学でおこなうことを提案する。大学に進学しなかった人や、卒業後時間のたっている人などでは、情報リテラシー能力獲得のためのガイダンスを受けていない人は多いと考えられている。これらの人に対して公共図書館と連携しながら公立大学図書館においても地域住民の情報リテラシー向上をはかることは、公立大学に求められている地域貢献の一つとして重要なサービスになり得ると考える。大学図書館では初年次教育としておこなってきた情報リテラシーガイダンスのノウハウを活かして、地域住民へのガイダンスや図書館ツアーなどを公共図書館と連携しながら企画・実践していくことが望まれる。

最後に、効果的なガイダンスは、カウンターにおける問い合わせ件数が減少し、カウンター業務の負荷軽減に役にたつ。負荷が軽減した分のパワーをさらなるガイダンスや高度なレファレンスに振り向けることができると確信している。